

日语研究

第7辑

《日语研究》编委会 编

商务印书馆

日语研究

第 7 辑

《日语研究》编委会 编

商务印书馆

2010年·北京

图书在版编目(CIP)数据

日语研究. 第7辑/《日语研究》编委会编. —北京:商务印书馆,2010
ISBN 978-7-100-07356-1

I. ①日… II. ①日… III. ①日语—研究—丛刊 IV. ①H36-55

中国版本图书馆CIP数据核字(2010)第181310号

所有权利保留。

未经许可,不得以任何方式使用。

日 语 研 究

第7辑

《日语研究》编委会 编

商 务 印 书 馆 出 版

(北京王府井大街36号 邮政编码 100710)

商 务 印 书 馆 发 行

北京瑞古冠中印刷厂印刷

ISBN 978-7-100-07356-1

2010年12月第1版

开本 787×960 1/16

2010年12月北京第1次印刷

印张 19½

定价: 35.00 元

《日语研究》编委会

主 编 彭广陆（北京大学）
副主编 徐一平（北京日本学研究中心）
林 璋（福建师范大学）
主编助理 潘 钧（北京大学）

编 委 （按汉语拼音顺序排列）

曹大峰（北京日本学研究中心）	陈访泽（广东外语外贸大学）
陈俊森（华中科技大学）	陈力卫（成城大学）
戴宝玉（上海外国语大学）	丁 锋（大东文化大学）
冯良珍（山西大学）	高 宁（华东师范大学）
李庆祥（中国海洋大学）	马朝红（商务印书馆）
彭 飞（京都外国语大学）	沈国威（关西大学）
宋协毅（大连大学）	王亚新（东洋大学）
吴大纲（上海外国语大学）	吴 侃（同济大学）
修 刚（天津外国语学院）	徐敏民（华东师范大学）
续三义（东洋大学）	许宗华（洛阳外国语学院）
杨 达（早稻田大学）	杨凯荣（东京大学）
姚莉萍（对外经济贸易大学）	于 康（关西学院大学）
于日平（北京外国语大学）	俞晓明（北京语言大学）
翟东娜（北京师范大学）	张麟声（大阪府立大学）
张佩霞（湖南大学）	张 威（清华大学）
张岩红（大连外国语学院）	赵 刚（西安交通大学）
赵华敏（北京大学）	朱春跃（神户大学）
朱京伟（北京外国语大学）	

卷 首 语

《日语研究》第7辑又和大家见面了。本辑共收有特约论文1篇,投稿论文14篇,书评2篇,计17篇。内容涉及较广,涵盖了社会语言学、语法学、词汇学、语用学、认知语言学以及日语教学等各个领域的研究。

本辑特约论文「日本人のポライトネス」约请日本关西学院大学教授阵内正敬先生执笔,该文为我们带来了日本社会语言学研究最前沿的研究动态和信息。阵内先生是日本知名的社会语言学研究专家,著作甚丰。论文充分展现了活跃在社会语言学研究第一线的这位大家的开阔视野和学术风范。文章开头举出了发生在中国留学生身上的例子,指出了两国文化的差异。之后,对导致差异的原因从社会语言学的角度进行了简要的阐释。作者认为,应联系地域性和时间性这两个维度对礼貌意识的多样性进行考察。就时间性而言,日本国语审议会2000年公布了“敬意表达”。作者提出要关注“自我表达”这个概念,它是促使从“敬语”改为提倡“敬意表达”的主要动因,也就是说,政府出台这个新的提法旨在鼓励日本不必像从前那样过分拘泥于“敬语”所带来的一定之规,而要注重自我意识的表达,根据具体情况合理使用礼貌性表达方式。接下来,作者具体考察了日本礼貌意识的变迁。作者本人曾参与2008年文化审议会发布的“敬语指针”的制定。作者认为,敬语使用上的所谓“混乱”是战后日本社会呼唤民主平等的思潮,即由大的社会背景变化所致,不一定具有消极意义。从时间维度看,日本持续100年鄙视方言的观念到了上世纪80年代发生了逆转,标准语和方言各自承担了相应的作用,即进入了所谓的“方言安定期”。其后20年,作为自我表达以及带有集团语言性质的方言获得了新生,使用方言不仅可以实现自我表达的功能,还可以增加人与人之间的亲和力。在论文最后,作为实例作者举了政府部门用语以及高中棒球比赛参赛队代表宣誓词的变迁,为我们展示了社会环境的变化给语言带来的具体而又真切的变化。作者最后意味深长地

写道,随着来自美国影响的日益减弱,随着世界走向多极化,形成日本独特的礼貌意识将会是比较容易的事情。

谢育新的“《唐话纂要》字音与杭州话的对应关系——以《杭州话音档》的ㄣ类韵母字为中心”是关于日本近世唐音“俗语”音系与中国方言字音体系对应关系的论文。此前除了第5辑上发表的陶友公的论文以及第4辑上刊登的李香的论文之外,这是第三篇探讨日语汉字音的论文。该文以《杭州话音档》中最具杭州话鲜明特点的ㄣ类韵母字为中心,采用实证方法比较了《杭州话音档》和《唐话纂要》韵母、声母与中古音的对应关系以及两者之间的对应关系,得出了除全浊声母、入声、ㄣ韵母以外,无论韵母还是声母,《杭州话音档》中最具杭州话鲜明特点的ㄣ类韵母字与《唐话纂要》的对应都不太整齐,整体而言《唐话纂要》的分类比较细致,与中古音韵地位吻合的结论。通篇文章显示出作者对文献的熟悉程度和求真务实的科学态度。

唐均的“「虎」字和「鳥」字日语训读的来源”是一篇不可多得的具有鲜明个性色彩的论文。该文从表示「虎」和「鳥」的这两个汉字所记录的日语词入手,通过词源关系的追溯来梳理和探索日语固有词汇来源的某种可能性。作者查阅大量文献,充分而又娴熟地运用民族语言文字知识以及语言地理类型学的研究方法,旁征博引,大胆假设,全文所透射出来的广阔视野和深厚的学术积淀从文后所列参考文献亦可窥见一斑。

语法学论文仍然是投稿论文涉及最多的领域。本辑共收有5篇语法学方面的论文。

于康的“‘受事位移+受事位移’的共现条件与语义选择——以「とりあげる」为例”是作者系列研究复合动词的一篇论文。复合动词是近年来日本以及国内日语学界研究的一个热点,留待解决的课题还有很多。比如,在 V_1+V_2 复合动词的研究中, V_1 与 V_2 的语法和语义关系一直是人们关心的焦点。作者指出,复合动词中存在这么一种现象,即某一语义类型的 V_1 与某一语义类型的 V_2 共现时, V_1 与 V_2 的语义关系会呈现出一定的规则性,可以归纳为某种语义关系模式。从对「とりあげる」语义关系的考察中可以发现,这种多类型的语义关系似乎也是有规律可循的,但这种规律的归纳有待于对大量的个别复合动词中 V_1 与 V_2 的共现条件的详细考察。作者的这篇

论文在此方面进行了有益的尝试。

孙佳音的“现代日语时间副词的共现关系和语序”是作者近年来一直在研究当中的有关现代日语副词的论文。时间副词是日语语法研究的一个难点,也是有待进一步深入探讨的一个领域。本文考察的是当一个句子中出现两个副词的情况下,其语序的规律性特征。作者通过语料库搜集了大量实例,对其进行描写式的考察。结论是:基本按照“时制副词—时体副词”的语序排列,但也有两个时制副词(时制副词—时制副词)或两个时体副词(时体副词—时体副词)共现的情形。违背“时制副词—时体副词”语序排列的主要有「マタ」「モウ」。作者还对两个时制副词共现和两个时体副词共现的情况进行了描写和原因分析。

曹彦琳的“限定用法「XだけP」中「X」与「-X」的关系浅析”通过实例对日语常用的「XだけP」句式进行了较为详细的描写,体现了作者具有敏锐的问题意识。论文主要以例句绝大多数“名词-ダケ”为研究对象,将“名词-ダケ”进一步分为“普通名词-ダケ”“数量词-ダケ”“指示词-ダケ”这3类,对前两类进行了比较具体的考察,分析了「XダケP」在限定提示用法中“X”与“-X”之间的各种语义关系。

王静的“对以名词性成分结尾的大标题中省略现象的研究——以《朝日新闻》为对象”从省略的角度对《朝日新闻》中以名词性成分结尾的大标题进行了分类描写,并且探明其分布趋势。作者发现,从数量上来看,“省略汉动词词尾型”所占比例最大,而四种主要的类型形态多样,呈现出报纸标题丰富多彩的语言表达效果。论文指出,要读懂大标题的含义,必须依靠其语言语境和非语言语境。

张玉玲的“日语拟情词的语义指向初探”是一篇运用语义指向原理研究日语的论文。语义指向是国内汉语学界最先提倡和运用的研究手段。近几年来,国内日语界也不断有人借用这个方法,并成功地运用到日语研究中,取得了不错的效果。运用在研究汉语过程中总结出来的方法考察日语,这个思路以及相应的尝试与探索值得提倡。作者发现,日语拟情词有的语义指向动词,有的指向动作主体,有的则指向叙事者。论文从以上几个方面对拟情词的语义指向进行了初步的探讨,结论是可分为4类:①语义指向动作

主体或指向动作;②同一拟情词其语义指向可以是动作或动作主体,这要视后项动词而定;③语义指向动词和动作主体以外的叙事者;④拟情词语义不能指向客体。

此外,本辑还包含了语用学、认知语言学方面的3篇论文。

赵刚的“话语标记「というか」的语义功能及语用功能”在考察先行研究的基础上,收集访谈、小说等语料中的用例,探讨话语标记「というか」的语义功能和语用功能。结论是:「というか」具有话语修正、话语置换、信息补充、话题转换和意向表明5种语义功能(前三者是对于话语的修正,后两者是对话题的提示或调整)。同时,还具有会话管理、语境构建、语用制约、人际关系调节4种语用功能。「というか」所体现的语用功能对于说话人的表达、听话人的理解以及交际目的的实现发挥了积极的作用。

陈访泽、严觅知的“日语鳗鱼句的语用分类及其语境依存度”根据理解鳗鱼句^①时所依存的要素,将鳗鱼句分为“百科知识依存型”、“标记依存型”和“纯语境依存型”三种类型。又依照名词A和名词B的关系、对标记的依存度以及句子形态等标准,将每一类型又进一步各分成2小类,总计6小类。并指出,随着语境依存度的减低,其理解难度也相对降低。

何芳芝、徐曙的“试从认知语言学的角度浅析动词「つかむ」和「にぎる」”,从突显的角度,以基于现实经验的假设说明了动词「つかむ」是突显动作,而「にぎる」则突显动作以外的事项。并且,分别对「つかむ」和「にぎる」由原型义项到边缘义项的语义扩展进行了分析,认为这两个动词的边缘义项均由隐喻和提喻机制扩展而来。作者在论文最后“余论”部分提出与其他学者及审稿人不同的意见。正当、合理的争鸣有助于推动学术进步,是有积极意义的,应予以肯定。

词汇研究一直是国内日语研究的薄弱领域。本辑共收有2篇论文,续三义的“关于‘新型外来语’”以『ありえない日本語』中所收的「ゲッチュ」「チェキ」「サンクー」等为例,认为这些所谓的新型外来语的形成既非为了

① 指日语中一种特殊的名词谓语句,其称谓来自于日本语法学家奥津敬一郎1978年出版的『「ボクハウナギダ」の文法』一书。「ボクハウナギダ」句原义是“我要鳗鱼饭”,但日语原句没有出现动词,只使用了相当于系词的「ダ」。

突出外语味儿,也不是为了炫耀新颖味儿,而是「ゲット」「チェック」「サンキュー」的变体,其形成不是标记层面的问题,而是涉及到日语外来语的使用,具体说是进入日语的外来语在运用过程中从异化走向归化,由此才形成的。它们已进入了日语体系,依据日语的语法规则形成变体,在运用时更好地突出了日语的特征。论文虽然撷取了现代日语外来语的一个现象断面,但从外来语的动态演变以及背后的日本人的语言意识为切入点分析问题,可谓颇具新意。而且解剖麻雀,以点带面,给人以启迪。

钟少华的“从罗存德《英华字典》看词语交流建设”是一篇带有实证性的论文。作者通过罗列大量的出自罗存德《英华字典》的译词,并且与今译以及日本明治时期的西周、井上哲次郎以及谭晏昌等创造的译词相比对,阐述了这部辞典在近代中日词汇形成史以及中日近代词汇交流史上的作用和地位。并且,作者借此强调,中国过去流行的“西方开创新词语,经过日本吸收改造,再被中国留学生搬回汉语中”的单一路径观念恐失之简单化。该文以罗存德字典及谭晏昌字典的条目内容说明,当时还有另外的学习途径。例如,近代香港出版的两部英华字典,已深入地研究与总结了近代汉语中的许多内容,并且将之比较和表述了出来,给中国人开拓了学习的新工具,也为西方人学习了解中国提供了新工具。

本辑还有2篇与日语教学相关的论文。一篇是渡边芙裕美的「中国人日本語学習者・日本語母語話者の読解過程の比較——読み時間を指標として——」。作者通过实验表明,日语母语者和日语学习者对同一个句子的阅读时间的分配是不同的。日语母语者对转换话题后的句子进行阅读的时间比较长,而对可以通过前文内容做出预测的句子所花的时间则比较短,不过这一倾向在日语学习者的调查结果中却未能发现。因此作者认为,在对日语学习者进行阅读指导时,应该加强根据已知信息及话题转换等进行后续句子预测能力的训练。

另外一篇是李友敏的“关于大学日语公选课学生日语学习观的调查研究——从提高日语公选课质量的角度出发”。该文以中国4所高校的130名日语公选课学生为对象,针对他们的日语学习观展开了调查。调查结果显示,大学日语公选课学生具有较高的学习自主性,并希望自己能够真正成

为学习的主体;教材对公选课学生来说意义重大,已成为他们学习的重要参照;同时,他们还希望能够导入重视实际应用的教学法和课程。作者就以上问题提出了改善的建议。文后附有2个调查表,可供参考。

本辑还收了2篇书评,一篇是评王华伟《现代日语否定表达研究》的书评,作者是王忻;另一篇是评杨玲《日语授受动词句结构意义研究》的书评,由彭广陆撰写。最近几年,越来越多的博士学位论文以专著形式出版,这首先有益于作者将自己辛勤研究的成果直接奉献于社会,同时也有利于学术界的同仁们展开学术批评与交流,以提高整体水平。书评是实现这个功能的重要一环,刊登书评也是国内外学术刊物的惯例,今后希望有更多的质量上乘的书评出现在《日语研究》上。

《日语研究》编委会

目 录

卷首语	《日语研究》编委会(1)
-----------	--------------

特约论文

日本人のポライトネス	阵内正敬(1)
------------------	---------

论 文

“受事位移+受事位移”的共现条件与语义选择

——以「とりあげる」为例	于 康(12)
--------------------	---------

现代日语时间副词的共现关系和语序	孙佳音(31)
------------------------	---------

限定用法「XだけP」中「X」与「-X」的关系浅析	曹彦琳(46)
--------------------------------	---------

对以名词性成分结尾的大标题中省略现象的研究

——以《朝日新闻》为对象	王 静(57)
--------------------	---------

日语拟情词的语义指向初探

——以副词使用为对象	张玉玲(79)
------------------	---------

话语标记「というか」的语义功能及语用功能	赵 刚(91)
----------------------------	---------

日语鳗鱼句的语用分类及其语境依存度	陈访泽 严觅知(105)
-------------------------	--------------

试从认知语言学的角度浅析动词「つかむ」和「にぎる」

.....	徐 曙 何芳芝(115)
-------	--------------

从罗存德《英华字典》看词语交流建设	钟少华(139)
-------------------------	----------

关于“新型外来语”	续三义(160)
-----------------	----------

《唐话纂要》字音与杭州话的对应关系

——以《杭州话音档》的ㄣ类韵母字为中心	谢育新(179)
---------------------------	----------

「虎」字和「鳥」字日语训读的来源	唐 均(205)
------------------------	----------

中国人日本語学習者・日本語母語話者の読解過程の比較

——読み時間を指標として—— 渡辺芙裕美 (220)

关于大学日语公选课学生日语学习观的调查研究

——从提高日语公选课质量的角度出发 李友敏 (238)

书 评

评王华伟著《现代日语否定表达研究》 王 忻 (259)

评杨玲著《日语授受动词句结构意义研究》 彭广陆 (269)

编者后记 (282)

来稿注意事项 (283)

英文目录 (286)

《日语研究》以往各辑目录 (288)

日本人のポライトネス

陣内正敬（関西学院大学）

提要 日本人の礼貌（对人的体贴意识）在战后社会的巨大变革中，负面因素趋于减少，取而代之正面因素逐步增多。国语审议会 2000 提倡“敬意表达”（非“敬语”）的理由，在于如今是重视“自我表达”的时代。本文以讨论“自我表达”为中心，通过敬语、方言、政府机关用语、高中棒球选手宣誓等案例，介绍日本人的正向礼貌化的情况。

キーワード 日本人 ポライトネス 敬意表現 敬語 自己表現

1. はじめに

相手に対して何がポライトであるかは、民族より地域によりさまざまである。つまり、コミュニケーションにおいて、何が相手を配慮した言動となるか、あるいは何が相手を心地よくさせるかについては、古今東西、実に多様である。

いわゆる異文化間のコミュニケーション摩擦には、大きく、言語そのものによるものと言動（言語の運用）によるものの二つがある。前者は、双方の言語の構造上の不一致から来るものであるから、双方が誠意を尽くして説明すれば解決の道は開けることが多い。また、文法や語彙の対照研究により、その摩擦を予測することも可能であり、対処方法も見つけることが可能である。他方、後者に関しては、「配慮」のあり方や、「誠実さ」の表現方法が異なっていることから来るものであり、このレベルは相当地に客観化し意識化されないとなかなか気づかれないものである。また、言語研究の現段階からしても、この点の知見はきわめて不十分であ

る。つまり、ある言語集団が持つポライトネスのあり方を明らかにしていくことが現在の言語研究の大きな課題となっているのである。

「誠実さ」に関するポライトネスの違いから生じた行き違いの例をひとつ紹介したい。あるコンビニでアルバイトをしていた中国出身の留学生のケースである。ある日、いつもの時間に自宅を出たにもかかわらず渋滞に巻き込まれて遅刻をしてしまった。彼は店長に事の次第を「説明」し、遅刻の理由をしっかりと主張した。そこにはおそらく、決してこの仕事をいい加減には考えていないことを店長にわかってもらう、という意識も働いていたであろう。ところが、店長の反応は「もっと素直になれ!」ということであつたらしい。推測するに、留学生が一生懸命行つた遅刻の説明は、店長にとっては一種の「責任回避」と映つたのであろう。こういう場合、日本の文化ではまず「謝罪」が普通であり、その後は、手短かに理由を述べてすぐに仕事にかかる、というのが「素直な」言動なのである。もちろん、この場合の「すみません」という謝罪行動は、事情がどうであれ、相手に「迷惑」をかけたことへの申し訳なきの表明であり、自分の責任かどうかには関係ない。ここに見られるように、日中の文化には「誠実さ」をどう表現するかという点での大きなギャップが存在している。

小論では、日本人のポライトネスがどうなっているのかを考察していく。なお、ここでのポライトネスは、「対人配慮のあり方とその表現」と定義しておく。戦後、価値観の多様化した日本では、「日本人は〇〇だ」というステレオタイプはもはや通用しにくくなっている。戦後すぐに生まれた団塊世代を境としたその前後の世代がその大きな違いを見せ、さらには団塊世代の子どもたちである団塊ジュニア世代あるいはそれ以降の世代がまた異なっている。これは、日本社会の変容と連動したものでもあり、ポライトネスの考察には、社会的背景を考慮に入れることが不可欠である。

一方、ポライトネスの多様性には時代性ととともに地域性もある。たとえば、関西と関東では、方言ということば自体の問題よりむしろ、コミュニケーションにおいて相手をどのように配慮し、それをどう表現するか

という点において、大きなギャップが見られる。

以下、ポライトネスの地域性については、別稿で議論することとして、ここでは、日本人のポライトネスの時代性に焦点を当てて論じる。

2. 敬語と敬意表現

ことばは社会とともにある、とはよく言われることであるが、実はここには、ことばと社会を媒介する「人」が前提とされている。つまり、ことばは人とともにあり、そして社会は人の集まりからできているので、この命題は「人」抜きでは成り立たないのである。

さて、第22期の国語審議会は2000年に、広い意味での敬語のあり方を議論し、『現代社会における敬意表現』という題名の答申を出した（以下、『敬意表現』、文化庁2000）。そこでは「敬語」ではなく「敬意表現」という用語が用いられ、その考えの必要性が説かれている。答申に盛り込まれた「敬意表現」の定義は以下のようなものである。

敬意表現とは、コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けしている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の立場や人格を尊重し、敬語や敬語以外のさまざまな表現からその時々にあふさわしいものを自己表現として選択するものである。

これだけではお題目的でわかりにくいだが、座長を務めた井出がその趣旨を分かりやすく解説したもの（井出2001）を参照すると、「敬語」ではなく「敬意表現」の提唱理由が見えてくる。ただ、ここで、上述引用文に見られる「自己表現」ということばに注目して筆者なりの解釈を述べておく。

自己表現の定義として「自己の人格、立場、態度を言葉遣いで表すことを言う。さまざまな表現の選択肢の中からどれを選ぶかによって、話し手がどのような人間であるかということが、その人らしさとして表れるということである」とある（『敬意表現』6ページ）。つまり、「敬語」の持つ、型にはまった思考から脱して、自分らしさを表現することを勧めるもの（あるいは日本人の言語使用の現状をそのようなものとして認めるもの）なのである。これに関して、丸山（1961）は、「「である」とことと「する」

こと」という論考の中で、戦後の日本人の考え方が固定した人間関係観から、主体的で流動的なものへと推移していることをすでに説いている。それから半世紀を経た日本社会は、ますますその方向への変化は進んでいると考えられ、その場その場での主体的な「自己表現」を「する」ことが価値のあることと見なされるようになってきている。

ここで「敬語」と「敬意表現」との考え方の違いを比喩的に言えば、それは「固体」と「液体」の違いに相当するのではないか、と思っている。井出(2001)が指摘するように、「日本語話者は、これまで多かれ少なかれ敬語という言語形式の呪縛から逃れられないでいた」のであって、「敬意表現」の考え方はそこから解き放ち、相手への配慮のあり方をもっと自由で柔軟なものにした。このことは、いわば、固体を液体に変えたと言えるのではないか。固形物はその形を変えようがなく、それが入る共通の器を誰もが用意しなければならないが、液体であれば自分なりの器を作って、自由に形を変えることができる。ここが、「敬意表現」提唱の時代認識であり、そのもっとも大切なところではないかと考える。

3. ポライトネスの変容

3.1 ネガティブからポジティブへ

1980年代に筑紫哲也氏が造語した「新人類」なることばが流行語となった。これは、当時の若者世代のものの考え方や言動が上の世代と明らかに違っており、上の世代からの戸惑いを含めた命名であったように思う。それは一言で言えば、「集団」より「個」を重んじる姿勢であった。集団の事情より個人の都合を優先させる考え方である。これはそれまでに行われてきた集団の暗黙のルールを内在化させて、そのルールに従って行動するという「型」重視からの逸脱を意味したから、上の世代は戸惑ったわけである。ポライトネスの観点から見れば、「型」重視はルールに従い個性を出さないという点でネガティブ・ポライトネスの要素が強い。新人類は、「型」による個性の抑制を嫌い、素直に自己を表現するという点

でポジティブ・ポライトネスの志向性を持った「人類」だと思なされる。

もっとも、ポライトネスのネガティブ性やポジティブ性は、あくまでも相対的なものであり、このような日本人の中での変化も他の言語文化から見れば「コップの中の嵐」と映るかもしれない。

3.2 敬語のゆれ・乱れ

2008年の2月に文化審議会は『敬語の指針』という答申を出した（文化庁2007）。これは、上述のような価値観の多様化や自己表現の時代の中で、敬語の具体的な運用指針を示したものである。筆者も文化審議会国語分科会の一委員として、この答申作成に関わったが、そこには、2000年の『敬意表現』の認識を踏まえて、自己表現を尊重した敬語の使い方が提案されている。つまり、ひとつの敬語を押し付けるのではなく、原則としていくつかの選択肢を挙げ、そこから自己裁量でもってある表現を選ぶという姿勢で書かれている。

そもそも敬語は人間関係の秩序を維持するための手段であり、つまるところ「遠慮」意識に基づいたものである。つまりネガティブ・ポライトネスを志向したものである。これは、現在の日本人のポライトネス意識とはいささかミスマッチな面が出てきたことは否定できない。とりわけ、自分の個性を素直に表出する傾向のある若い世代にとっては、敬語によってそれを抑制することは苦手でありストレスを感じることもなる。敬語が人間関係の潤滑油になるどころか、逆に「壁」となるということもまま起こり得ることなのである。

考えてみると、現在の敬語のゆれ・乱れが云々される大本には、上下意識と親疎意識両方からのインパクトがあるのではないか。つまり、戦後の民主平等の気風の中で、親と子、先輩と後輩、教師と生徒などに見られた目上目下意識は明らかに衰退してきたし、また親疎意識レベルにおいては、遠慮意識の衰退とともに「親和性」（フレンドリーであること）を重んじる気風が増してきたことである。象徴的に言えば、かつてヨーロッパにおいて、フランス革命によって引き起こされた身分制社会の崩壊により、人称代名詞 T と V の用法が上下意識から親疎意識へ変わるとい